



(京都西南部)

京都・長岡京跡(3)

- 1 所在地 京都市伏見区菱川町
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)二月～一九八七年三月
- 3 発掘機関 財京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 長宗繁一・鈴木広司
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

長岡京跡は、現在の行政区分では向日市・長岡京市・大山崎町・京都市の三市一町にまたがっている。当報告は京都市域における調査で、京都市外環状線道路整備事業に伴い、昭和五五年度より実施している一連の発掘調査の一つで、本年度分はV区と称している。

調査地は、向日市との境に近い標高約一四mの水田地帯に位置する。V区では平安時代後期の墓跡、長岡

京の推定東二坊大路面とその東西両側溝を検出した。なお東西両側溝の溝心々の距離は約二四mであった。また、大路西側において、建物跡・井戸・沼状の遺構を検出し、その下層から、奈良時代の条里・水田跡などを検出している。

8 木簡の釈文・内容

木簡は五点で、すべて長岡京期の遺構から出土した。(1)(2)(3)は沼状遺構、(4)は柱穴、(5)は東二坊大路西側溝からの出土である。

- (1) 〔長〕地子米五斗
92×21×2 033
- (2) 〔長〕地子米川□×
(70)×17×5 039
- (3) 〔長〕黒米。五斗
〔謹解カ〕
131×21×2 051
- (4) 進上 □ □
〔謹解カ〕
(140)×(30)×7 061
- (5) 〔長〕□□□□十口
(120)×26×7 039

(4)以外は荷札と考えられる。このうち(1)(2)は「地子米」と記されている。これまで地子と表記された木簡は、向日市教育委員会の長岡京左京一三次、同二一一・二次、同五一一次の太政官厨家推定地(左京二条二坊)のSD一三〇一から二三三、同地域での立合調査八〇一八次のSD五二〇二から三三三が出土している。長岡京以外では、平城宮第三五次調査のSK四四五三から「栗田餽銭」の木簡が

出土して、天平年間のものと推定されている。本調査地出土の地子米木簡は、品目・量のみの簡単なものとなっており、国・郡・郷名、貢進者名、検収署名、日付などを省略する点で、SD一三〇一出土の地子米木簡と異なる。(3)は(1)(2)と同様の性格をもつと考えられる。上の三字の意味が不明である。黒米は仕丁等の常食に充てられるもので玄米である。地子米は白米で、官人等の常食に充てられている。本調査地に上、下両身分を擁し、太政官と関わりのある、地子米を移送させる力を持った人物、或は施設の存在も考えられよう。(4)は曲物の底板に書かれており上半を欠く。文章の体裁をなさず、習書と思われる。

当調査地付近には「川原寺」の存在が推定されてきた。これまでの調査では、その位置を知る手掛りさえつかめていなかった。しかし前年度のT区の調査以来、わずかながら解明の糸口がつかめてきた。T区では厨房を思わせる遺構群及び漆紙文書片、三三片におよぶ墨書土器、多量の転用硯の出土をみている。今回出土の木簡と考え合わせると、共に多人数の給食を必要とする施設、常に文書が行きかっていた場所であることから、「川原寺」の一部を検出した可能性があると考えている。とは言え、当調査地付近の発掘調査はごくわずかであり、今後の調査例の増加を待ちたい。

9 関係文献

向日市教育委員会『長岡京木簡一』(一九八四年)

(鈴木広司)

